

平成 26・27 年度 英語教育推進事業

洋書を活用した英語学習の実践研究のまとめ

平成 28 年 11 月 大阪府教育庁

はじめに

大阪府教育庁では、平成 26・27 年度の 2 年間、「小・中・高等学校を通じてグローバル化に対応した英語教育を強力に推進し、国際共通語としての英語によるコミュニケーション力の基盤をはぐくむ」ことを目的として、英語教育推進事業を実施しました。その中で、中学校については、府内 7 中学校を研究協力校に指定し、「洋書を活用した英語学習の実践研究」に取り組みました。

本冊子は、各研究協力校の研究成果を取りまとめるとともに、今後の英語教育の方向性や、それを踏まえた授業改善のヒントを掲載したものです。

この冊子が、今後、各中学校で活用され、「習った英語」を実際に「使える英語」へと変容させる授業づくりの一助になることを願っています。



1. 今、求められている英語の授業
2. 洋書を活用した英語学習
3. 授業改善のヒント

1. 今、求められている英語の授業

(1) 知識の習得から、英語によるコミュニケーション力の育成へ

社会の急速なグローバル化が進む中、英語教育は大きな転換期を迎えています。次期学習指導要領では、小学校3・4年生で外国語活動の必修化、5・6年生で外国語の教科化が予定されるなど、国を挙げて英語教育の改革が推進されています。

中学校の英語の授業においても、英語の4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）をバランスよく、かつ統合的に指導することのさらなる充実が求められています。また、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成25年12月13日文部科学省）で、「授業を英語で行うことを基本とする」ことが示されるなど、授業を“英語を用いたコミュニケーションの場”として活用することが求められています。

(2) 「英語を使うなにわっ子」を育てるために

大阪府教育庁では、平成23～25年度「使える英語プロジェクト事業」において、「義務教育終了段階で自分の考えや意見を英語で正確に伝えることができる子ども」を育成する授業をめざし、府内50中学校区、101小学校で研究を行いました。

研究の成果については、平成25年8月に冊子「『英語を使うなにわっ子』育成プログラム」として取りまとめ、府内の小中学校への普及を図りました。主なポイントは次の通りです。

- 学年や単元の目標を設定し、その目標の達成に向けてバックワード（逆算的）で授業設計を行う。
- 「習得の時間」で学習した表現を「活用の時間」等で発信することで「使える英語」になることから、「習得」と「活用」のある授業づくりを行う。
- 生徒が達成感、自己効力感を感じられるよう、「何のために英語を使うのか」という目的意識を生徒に持たせながら指導を行う。

「英語の知識をどれだけ習得したか」という授業から、「習った英語を使って、何ができるようになるか」という視点で授業改善を行うことが、ますます求められています。

2. 洋書を活用した英語学習

(1) 洋書を活用した多読に係る実践研究

大阪府教育庁では、平成 26・27 年度「英語教育推進事業」において、府内 7 中学校を研究協力校に指定し、「洋書を活用した英語学習の実践研究」を行いました。

※研究協力校

能勢町立西中学校（当時）、能勢町立東中学校（当時）、
柏原市立堅上中学校、松原市立松原第二中学校、和泉市立槇尾中学校、
泉佐野市立長南中学校、大阪市立今宮中学校

各中学校では約 800 冊の洋書を整備し、洋書を活用した多読に係る指導技法の実践研究に取り組みました。

「多読」とは、単語の意味、文法、表現の細部にとらわれることなく、物語の要点を把握させ、ストーリーを楽しみながら英語の「量」を読ませる取組みのことです。速く、訳さず英語のまま、なるべく辞書を使わず読み、英語を英語のまま理解することで、英語の語彙力、表現力の向上を図ります。また、「読むこと」に加え、他の 3 技能（聞くこと、話すこと、書くこと）と関連した活動を設定することで、生徒の総合的な英語力の育成にもつなげるものです。



(2) 洋書を活用した授業

①洋書活用の流れ

洋書を活用した英語学習というと、いきなり授業で洋書を読むことをイメージするかもしれませんが。しかし大切なのは、普段から生徒が多くの英語に触れ、英語を読むための「素地」づくりをしておくことです。

例えば、授業中は、教員は基本的に英語を用いることとし、英語を使って生徒に指示をしたり、生徒と簡単な会話をしたりするなど、生徒が英語を英語のまま受け入れる感覚を養うようにします。また、発音と綴りの関連に着目した指導方法（フォニックス）を用いて、英語の「読み方」を生徒に教え、生徒が自ら読むという感覚を養うようにします。

その上で、次のような段階を踏まえて洋書を活用すると、大変効果的です。

STEP 1	洋書活用のねらいの共有することで、洋書活用のメリットを理解させる
STEP 2	教員による読み聞かせ、音読により、本を読むことへの興味をもたせる
STEP 3	ペアやグループで読むことで、本読みの楽しさを体感させる
STEP 4	個人で読むことで、自分の興味関心に合わせて読ませる

②洋書活用のポイント

<STEP 1>

洋書活用の主なねらいは、次のとおりです。

1. 自然な文脈の中で使われる多くの表現に出会い、未知の単語や表現の意味を類推しながら読み、言葉が現実にもどのように使われているかを知る。
2. 多くの英語に触れることにより、英語を英語で理解しようとする習慣を身に付ける。

たとえ、多くの洋書を速く読めるようになったとしても、内容が理解できていなければ意味がありません。学級でねらいを確認し、洋書活用によってどのような力がつくのかを共有しておくといいいでしょう。

参照 ■p.7 能勢町立西中学校の取組み

<STEP 2>

実際に洋書を読む、といっても、最初から生徒が自力で読み進めるのは難しいかもしれません。まずは洋書を読むことへの興味を喚起し、生徒が意欲をもって読めるような工夫を行うと効果的です。

◆読書前：「意欲の喚起」

タイトルや表紙のイラストから得られる情報をもとに、洋書に対する生徒の興味を喚起する活動を行います。読書の前に、次のような生徒への問いかけを行うなど、洋書の内容と生徒の経験や既習の知識をつなぎ、読むことに対する意欲を高めることが大切です。

(例)

- ・表紙に掲載されている登場人物をさしながら、「What's her name?」などと問いかけ、思い出させる（シリーズものの洋書の場合）
- ・表紙の絵を見ながら、「What does Jim have in his hand?」「He has a pen.」などのやりとりをする。
- ・習ったフォニックスの知識を使って、初めて見るタイトルを読んでみる。 等

◆読書中：「音読」

音声と文字を意識した活動をします。洋書を活用して、自然な英語表現に多く触れながら、音読することにより、インプットからインテイク（定着）の効果を高めることが期待されます。

a. モデル提示

音源を活用したり、教員が読み聞かせをしたりするなどにより、生徒自身が「めざすモデル」を認識できるようにします。

b. 全体音読

a.のモデルをベースに、生徒が音読に挑戦します。この段階を丁寧に繰り返し、できればリード・アンド・ルックアップまで実施すると、次の活動に生きてきます。

c. バズリーディング

生徒一人ひとりが自分のペースで音声化（音読）に挑戦します。

d. ペア（グループ）リーディング

ペア（グループ）で互いの音読を聞き合ったり、教え合ったりして、読みのブラッシュアップを図ります。

◆読書後：「コミュニケーション」

内容理解を深めるため、読了後に、本の内容に関するコミュニケーション活動を行うと効果的です。内容に関するQ & Aや、要約、さらには話の続きの創作など、クラスで、ペアで、グループで楽しみながら取り組むことで、一層の効果が期待できます。

参照 ▣p.9 柏原市立堅上中学校、泉佐野市立長南中学校の取組み

<STEP 3>

教室全体で洋書を読むということに慣れてきたら、ペアやグループで協働的な活動を取り入れます。

ペア読みでは、2人で1冊を協力して読んだり、2冊を交互に読んだり、わからないことがあれば教え合うなどして読み進めます。読了後には、洋書の内容に関するクイズを出し合ったり、感想を言い合ったりします。グループ読みは、ペア読みと同じですが、少し長めの洋書を読む時に有効です。

参照 ▣p.9 和泉市立槇尾中学校の取組み

<STEP 4>

STEP 3 に慣れてきたら、または並行して、個々の生徒が自分の力に合った洋書を自ら選び、自分のペースで読み進める活動を取り入れます。辞書や友だちの力を借りずに、前後の流れや挿絵などをヒントに、類推しながら読み進めます。この時、教員は、生徒が自分の力に合ったものを選んで読んでいるかチェックし、必要に応じてアドバイスをすることが大切です。

参照 ▣p.8 大阪市立今宮中学校の取組み

③環境整備

生徒が自分の興味や能力に応じて洋書を選べるよう、できるだけたくさんの洋書を整備することが必要となります。また、英語教室や学校図書館等に、難易度に応じて整理して配架しておく、生徒が選びやすくなります。

参照 ▣p.8 能勢町立東中学校の取組み

しかし、実際には、このような環境を整えることは難しいかもしれません。その場合、無料で絵本や読み物をダウンロードできるサイトを利用したり、1つ前の学年の教科書を利用したりするなど、生徒にとって読みやすい教材を用意し、「これなら読める、分かる、できる。」という体験を重ねられるように工夫することが効果的です。

④自己評価・振り返り

STEP4 の個人読みができるようになり、意欲的に読み進められるようにしていくためには、生徒の取組み（努力やがんばり等）を生徒自身が認識できるように工夫することも必要です。例えば、読んだ本について、ページ数等を記録し、読んだ総ページ数を足し上げていく。それらを時間軸に沿ってグラフにして、その伸びを視覚的に実感できるようにすると、生徒の達成感につながり、読むことの自信にもつながります。また、読んだ感想や印象に残ったことなどを、振り返りシートに英語で記載するようにすると、英語を「書く」活動にもつながります。

参照 ▶p.8 松原市立松原第二中学校の取組み

(3) 研究協力校での取組み

各校では、学級や生徒の状況等に応じて、教員が工夫を積み重ねて研究を行いました。

活動の意義を生徒と共有 ～能勢町立西中学校～

多読の活動に入る前に、下記の資料を配付し、生徒に多読の方法やねらいについて説明した。

【多読をすると得られること】

- ☆英語に慣れる
- ☆文法を活用できるいい練習になる
- ☆生きた英語が身につく
- ☆単語力・文法力が付き、リーディング速度が上がる
- ☆実はリスニング力も上がる
- ☆英語をそのまま理解するので、英語の脳が作られる

英語にたくさん触れれば、無理に暗記をしなくても自然に英語は理解でき、書いたり話したりできるようになるよ。本をたくさん読むと、同じ表現に何度も出会うので、必ず意味が自分でわかるようになってくるよ。それってすごく素敵なことだよね!!!

注意!

レベルを上げ過ぎると、つまらなく感じてしまうよ。何週間後かに同じものを読んでもいいし、レベルを下げて、速く読めるように挑戦してもいいし、本は楽しく読めるものを選んでね。

【楽しく読めば英語力が上がる】

多読3原則

1. 辞書はひかない
2. わからなくなったら飛ばして次に進む
3. つまらなくなったら、その本は読むのをやめる

辞書をひいていると、話が中断しおもしろくなるね。もちろんときどきひいてもらってもいいけれど、辞書をひかなくても読める本を選ぶといいよ。

理解度は、60%で十分だよ!!! どんどん取り組んでいこうね!

【多読のいいところ】

- ☆楽しいからあきない
- ☆自分の好きな本が選べる
- ☆今までの英語学習に比べて10~100倍の英文に触れることができる

このことにより、生徒は多読の活動について目的意識を持ち、意欲的に取り組むことができた。

生徒が活用しやすい洋書の整備 ～能勢町立東中学校～

洋書の語数や難易度ごとに分類し、英語教室に配架した（難易度は語数や表現に応じて、発行社が設定しているもの）。

生徒が個人読みやペア読みをする際、自らの力や興味に応じて、洋書を選べるため、その後の読書活動に対して意欲的に取り組む姿が見られた。



個人読み活動の充実 ～大阪市立今宮中学校～



自分のペースや習熟段階に応じて読み進められるよう、個人読みの時間を充実させた。わからない単語はすぐに辞書で調べたり人に聞いたりするのではなく、推測して読み進めるよう促した。

英語を読むことが得意な生徒は、意欲的に何冊も読み進めていた。得意ではない生徒も、自分のペースで読めるため、あきらめず前向きに取り組んでいた。

振り返りシートの活用 ～松原市立松原第二中学校～

洋書を読んだ授業の終わりには、本のタイトルやレベル、感想等を記録させることにより、生徒が自らの活動を俯瞰したり、達成感を持てるようにした。

慣れるに伴い、英語で感想を書くことにもチャレンジするよう促し、書けた英文を全体に紹介するなどし、互いのがんばりを共有する場面を多く持つようにし、意欲の向上につなげた。

LET'S READ English BOOKS

No	Date	Title	How did you like the book?	Level
0	10/29	Winnie the Pooh	①初めてプーさんの本を読んだ。②楽しい場所だと知った。③わからない単語もあったけど、だいたいわかった。	1
1	10/26	The Big Egg	①子供は卵を拾い集めて、箱に入れて。②1人の子供がすごく大きな卵を見つけた。③卵を交換が楽しかった。	2
2	10/18	The Hole in the sand	①子供たちが穴を掘っていた。②大きいコマで掘って、お宝が見つかった。③穴を掘る楽しかった。	2
3	10/30	Poor	①大抵病気になる。②子供が病気で。③病院に行かなくてはいけないこと。④悲しい。	2

ペア活動を生かした活動 ～和泉市立槇尾中学校～



自分で選択した洋書を個人で読んだ後、他の技能との統合を図った活動を行った。

たとえば、ペアの生徒に対して、話の内容が伝わるように読み聞かせをしたり、読んだ内容について英語で感想や概要を伝え合ったりするなどした。

洋書を用いた発展的な活動 ～柏原市立堅上中学校～

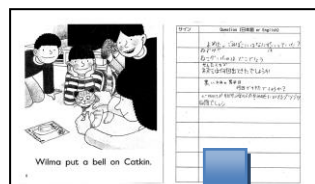
個人で読んだ洋書の中から1冊を選び、クラスメートに対し、読んだ内容が伝わるよう感情を込めて読み聞かせる活動を設定した。

生徒は、単に英語を読むだけではなく、登場人物によって声色を変えたり、状況をよりわかりやすく伝えるためにアドリブを入れたりするなど、工夫を凝らして読み聞かせていた。終了後には、肯定的評価を重視した相互評価を取り入れたため、読むことへの自信につながった。



目的を持って読めるような工夫 ～泉佐野市立長南中学校～

(※1)



(※2)

サイン	Question (日本語 or English)
	よめた。こみまごにはなにが書いていた? おみまご!!
	おこがいつの1.どこでしよう せんたくかか
	ネズミは何回出てきたでしょうか
	黒いおみの男女は 何回でてきたでしょうか?

洋書の最終ページ(※1)に質問シートを貼付しておき、読後に生徒が内容に関する質問を日本語または英語で書くようにした(※2)。質問以外に、「この後に何が起こったか」といった、想像を促す質問も可能とした。

質問シートを見た生徒は、これらの質問に答えるため、何度も洋書を読み返したり、次の質問文を作成するため、考えながら読むなどしていた。

(4) 研究協力校 教員の声

各中学校で研究を進めた結果、生徒・教員双方に、望ましい変化が見られました。

英語が苦手な生徒も、自分のレベルに合った洋書を読むことで、少しずつ読めるようになってきた。また、読めることで、生徒の英語への意欲が高まった。生徒は、英語を使って書いたり話したりすることに、少しずつ自信を持つようになった。

個々の文章が多少わからなくとも、話の流れやオチなど全体をつかもうとする読み方ができるようになってきた。普通の授業でも、まず辞書なしで教科書を読んでみようとする姿勢が見られてきた。

生徒が洋書を通して英語に慣れてきたと判断し、それまでは授業を日本語で行っていたが、思い切って英語で行うようにした。生徒は今では英語の指示や説明でもほぼ理解できている。教員が英語で授業を行うことで、生徒はさらに英語に触れる機会が増え、日本語を介さずに英語で理解することができつつある。

生徒の習熟度に合った絵本を教員が選び、一人読みをさせた。英語が苦手な生徒は自分のペースで読み、得意な生徒は意欲的に何冊も読み進めていた。また、定期テストにおける「外国語理解の能力」の分野では、初見のまとまった英文を読みとる問題を出題しているが、正答率の向上が見られた。

洋書を活用した活動を進めた結果、「読めた」ということが自信につながり、教科書等を用いた他の学習においても、積極的に取り組もうとする姿勢が見られるなど、波及効果も見られました。

このように、洋書の活用を軸に、各研究協力校において4技能を育成するための授業改善が進んだことは成果であると考えます。



3. 授業改善のヒント

STAGE 1 目標の設定 ～CAN-DO リスト～

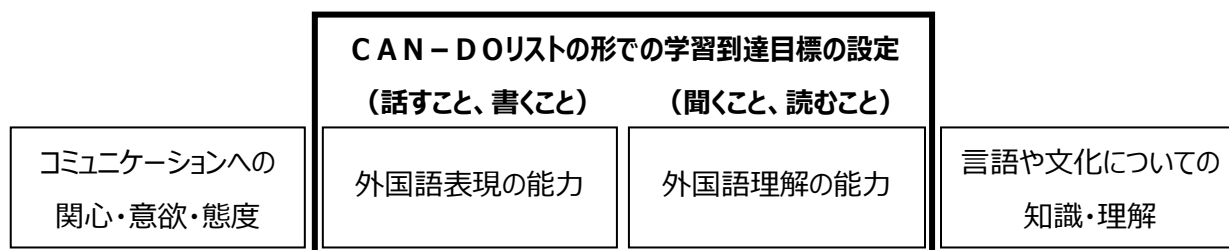
POINT

「何ができるようになるのか」を明らかにした授業づくり

(1) CAN-DO リストとは

英語力を育成するためには、授業で「生徒が身につける力」を明確にすることが重要です。それは「三人称単数現在形の文が書ける」や「動名詞の使い方を理解することができる」というようなことではなく、実際の場面において、英語を使って何ができるかを明確化することです。

CAN-DO リストとは、こうした考えを踏まえて、英語の学習到達目標について、4 技能を用いて「～することができる」という形で学習段階ごとに整理した一覧です。各中・高等学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するため、学校の状況や生徒の実態等に応じて設定します。CAN-DO リストの形での学習到達目標は、観点別学習状況の評価における4つの観点のうち、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」について設定します（下図参照）。



(2) CAN-DO リスト作成のねらい

教科書の内容を教えることに精一杯になっていると、語句や文法事項の習得が目的になり、「最終的にどのような生徒を育てたいのか」ということを見失ってしまうことがあります。「教科書を教えるのではなく教科書で教える」という言葉がありますが、CAN-DO リスト作成のねらいは、教科書等を用いて、生徒が「何ができるようになるのか」を明らかにしながら、次の視点で授業を実施することにあります。

- 生徒が身につける能力を明確化し、指導と評価の改善に利用する。
- 4 技能を総合的に育成し、自らの考えを伝える能力、思考力・判断力・表現力を養う。
- 教員と生徒が目標を共有することで、生徒が主体的に学習する態度・姿勢を身につける。

研究協力校では、洋書を活用した英語学習の研究を行うにあたり、下記のような CAN-DO リストを作成・活用しました。

英語教育推進事業(中学校) 英語学習プログラム到達目標(例) ※H26年度入学生			
	1年生	2年生	3年生
読む *(は音読)	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な自己紹介を読み理解することができる (例 Hello, my name is Ken. Nice to meet you. I like apples.) 身近な話題に関して書かれた文章を読んで理解することができる (例 Our teacher lives in Osaka. He can play soccer well.) 簡単な物語を読み、あらすじを正しく理解することができる(例 Oxford Reading Tree stage 3~4) *意味のまとまりごとに適切に区切りながら声に出して読むことができる 	<ul style="list-style-type: none"> 説明文の大切な部分などを正確に読み取ることができる 簡単な、ややまとまった量の物語を読み内容を正確に理解することができる(例 Oxford Reading Tree stage 5~6) *書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読できる 写真、イントネーションを参照して声に出して読むことができる 	<ul style="list-style-type: none"> 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえることができる さまざまな種類の文章を目的に応じた読み方で読むことができる *やや難しい、まとまった量の物語を読み正確に理解することができる(例 Oxford Reading Tree stage 7~8) *大切なところを強調して読むなど、発話の意味を理解し、聞き手に正確に伝わるように声に出して読むことができる
「読む」WPM目標	WPM40~60語	WPM60~80語	WPM80~100語
聞く	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な自己紹介を聞いて、その内容を理解することができる *クラスルームイングリッシュの他、行事などに参加することができる *自分の興味・関心のある話題に関する英語の話を理解することができる(趣味や好きなことなど) 		
「聞く」WPM目標	WPM100~		
話す	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な自己紹介をすることができる *自分の気持ちや相手に伝えることができる (例 I'm hungry. I feel sad. I'm glad to see...) *絵や写真を用いて、身近な人物について説明 (例 Look at this picture. She is a famous singer. She sings very well...) 		
書く	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介文を書くことができる *自分の興味・関心のあることについて短文程度 *手紙やメールなど、相手に自分の考えが伝わる *読んだ物語の感想を短い文章で書くことができる 		
パフォーマンステストのねらい	[1学期] 2~3文程度の英文を読み内容を理解する(例 自分自身について説明する文)	[2学期] 2~3文程度の英文を読み内容を理解する(例 自分以外の他人について説明する文)	
			1年生
読む *(は音読)			<ul style="list-style-type: none"> 簡単な自己紹介を読み理解することができる (例 Hello, my name is Ken. Nice to meet you. I like apples.) 身近な話題に関して書かれた文章を読んで理解することができる (例 Our teacher lives in Osaka. He can play soccer well.) 簡単な物語を読み、あらすじを正しく理解することができる(例 Oxford Reading Tree stage 3~4) *意味のまとまりごとに適切に区切りながら声に出して読むことができる
「読む」WPM目標			WPM40~60語
			<ul style="list-style-type: none"> 簡単な自己紹介を聞いて、その内容を理解することができる

<参考資料>

- ① 各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO」リストの形での学習到達目標設定のための手引き (平成 25 年 3 月 文部科学省)

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm

- ② 大阪版 英語 CAN-DO リスト (平成 27 年 11 月)

http://www.osaka-c.ed.jp/contents_links/forteacher_top.html

※パスワードが必要です

STAGE 2 目標に応じた言語活動の設定

POINT

教室を実際のコミュニケーションの場にする

(1) 英語は使いながら習得するもの

英語を習得し使えるようになることは、スポーツができるようになるのによく似ています。サッカーやテニスなどの技能を身につける時のことを思い浮かべてみてください。筋力トレーニングや基本動作などから始め、徐々に技を増やしていき、ある程度できるようになったらミニゲームなどの実践を行います。その過程でたくさん練習し、試行錯誤を繰り返すことによって、少しずつ上達していき、他校との試合などで身につけた力を出せるほどになります。

このことを英語の授業にあてはめるとどうでしょうか。生徒は、音読やパターンプラクティスといった基本的な練習を行いつつ、目的を持って読む活動や友達と英語で即興的なやりとりをするといった実践的な練習や、家庭での復習などを行うことで、試行錯誤を繰り返しながら、英語を実際に使えるようになっていくと考えられます。

(2) 教室英語 (Classroom English) のすすめ

「英語を使う」といっても、日常的にそのような機会がある生徒は少なく、ほとんどの生徒にとっては、週4回の英語の授業だけが、英語を使う場となります。授業を実際のコミュニケーションの場面とし、生徒がたくさん英語に触れ、活用できるようにするためには、先生が率先して英語を使うことが大切です。

あいさつや指示する英語は、毎回のように授業で使うものなので、生徒は繰り返し触れることで、日本語に訳さずに、自然に英語を理解するようになります。たとえ未習の表現であっても、例えば、「Have you finished?」など、実際の場面で使える表現は、1年生からどんどん使っていくとよいでしょう。

また、「ほめる英語」は、生徒の意欲の向上にもつながります。例えば、「You did a Good job!」「Great!」などの言葉とともに、表情や声のトーンを工夫すると、生徒は非言語コミュニケーションの重要性も体感できます。「促す英語」も使うとより効果的です。行動を促すだけでなく、思考を促すような疑問詞を使った問いかけ (What do you think? など) は、日常的に取り入れたい表現です。

教室英語では、生徒の英語を引き出すことが大事です。1年生のうちから、意識的に英語でやりとりするようにしていきましょう。

◆ 教室英語 (Classroom English) の例

あいさつ等

- Hello / Good Morning / Good Afternoon, everyone.
- Goodbye / See you, everyone.
- That's all for today. / Have a nice day.
- How are you? & I'm fine / good / OK / sleepy / hungry, etc.
- How's the weather? & It's fine / sunny / rainy / cloudy / windy, etc.
- What day is today? (What day is tomorrow? / What day was yesterday?)

指示等

- Open / Close your _____. (textbook, notebook, file, pen case, etc.)
- Pick up / Put down your pen. (pencil, red pen, etc.)
- Write your name in English.
- Last person, please collect _____.
- Stop talking / writing and listen carefully.
- Have you finished?
- Do you have any questions?
- Make pairs / groups of four.

ほめる、うながす等

- Good job / Nice / Well done, etc.
- That's right.
- Nice try.
- Take it easy / Relax.
- Thank you. & You're welcome.
- Let's give her / him a big hand.
- How about you?
- What do you think?
- Why do you think so?

生徒から

- Here you are. & Thank you.
- One more time, please.
- Can / May I ask you a question?
- How do you say / spell _____ in English?
- We are ready.
- We've finished.
- I think / I'm afraid that...
- I agree / don't agree because ...

(3) Input for Output の考え方

母語でない言語を話したり書いたりする、つまり「アウトプット」できるようになるためには、大量の「インプット」が必要です。そのためには、聞いたり読んだりする活動を授業の中で意識的に取り入れる必要があります。例えば、前項で紹介した教室英語は、「聞くこと」によるインプットであると同時に、生徒に英語を話させることにもつながるので、アウトプットを引き出す活動であると言えます。

また、「読むこと」によるインプットという、一般的には、一文一文の意味を確認しながら進めるといった活動を思い浮かべるかもしれませんが。確かに英文理解をする上では、丁寧に読むという活動も大切です。しかし、日常の場面では、ざっと読んで全体の内容をつかんだり（skimming）、特定の情報を素早く見つけたりする（scanning）ことが必要となってきます。

まとまりのある英文を読む活動をする際、全てを訳読するのではなく、タイトルや文脈の流れから概要を理解するなど、「直読直解」の力をつける活動を取り入れることが大事です。生徒にとって未知の英文、特に少し易しい英文をたくさん読む活動は、そのような力をつけることにつながるだけでなく、「読めた」という達成感を得ることができ、学習意欲の向上につながります。

本事業における洋書を活用した指導を行うことは、このような点でも大変効果的です。

さらに、読んで終わるのではなく、読んだものについて話したり書いたりするなどのアウトプットの活動につなげることが重要です。

<読む活動を他の活動につなげる活動例>

- 読んだ英文について、感想を述べる（書く）。
- 読んだ英文の「その後」のストーリーを書き加える。
- 読んだ英文に使用された挿絵を使って、他者にあらすじを説明する。
- 読んだ英文を他者に紹介するプレゼンテーションを行う。等

STAGE 3 目標の達成状況の把握・指導の改善

POINT



「振り返り」を次の授業づくり生かす

(1) 達成状況の見取り

CAN-DO リストの形での学習到達目標を設定し、言語活動を工夫し、実施した後は、生徒が「どれぐらいできるようになったのか」を適切に把握することが必要不可欠です。その把握のために方法については、CAN-DO リストを設定した時に、あらかじめ想定しておくことが望ましいと言えます。

<各技能の評価方法の例>

聞く	話す	読む	書く
・リスニングテスト ・インタビューテスト	・インタビューテスト ・スピーチ等の発表	・ペーパーテスト ・作品（読後の感想や 報告等）	・ペーパーテスト ・作品（エッセー、紹介 文等）

大事なのは、その評価方法が、それぞれの資質・能力を評価するものとして、妥当であるかどうかの検証を行うことです。「話すこと」を評価するためにスピーチ発表を行った際、生徒は覚えた英文をただ読んでいるだけ、といったことはありませんか？ もちろん、自分の言いたいことをまとめて発表するのは大事な活動です。しかし、「話す」という力を適切に測るためにはもう一工夫が必要です。例えば、キーワードだけを記載したメモを用意し、それを基に1分間で意見を発表する、といった即興的な話す活動を設定することなども可能でしょう。

<参考資料>

- ① 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（平成 23 年 11 月 文部科学省）
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/chuu/10_chu_gaikokugo.pdf?time=1476356948926
- ② 中学校における学習評価に関する参考資料（平成 25 年 7 月 大阪府教育委員会）
- ③ 「英語を使うなにわっ子」育成プログラム（平成 25 年 8 月 大阪府教育委員会）
<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/erueigo/>

(2) 指導の改善

把握した結果をもとに、授業における言語活動や使用する教材、評価方法等が、妥当であったかどうか、教科会議等で検討したり、互いに授業参観をしたりするなどして、教員間で共有し、必要に応じて改善することが必要です。

また、CAN-DO リストの設定が、適切であったかどうかを見直すことも大切です。記載されている内容や難易度については、毎年見直すことが望ましいといえます。

(3) 生徒による自己評価

教員による評価だけでなく、CAN-DO リストを生徒の自己評価に活用することも可能です。生徒自身が、「何ができるようになったか」を振り返ることにより、自らの頑張りをほめ、達成感を得ることができます。達成しなかったことについては、何をどのようにすれば達成していたのか、と自身に向き合うことにより、次の学習への動機づけとなります。このように生徒が自律的に学ぶことは、英語力の向上のみならず、すべての学習過程に必要なことです（ただし、生徒の自己評価を教員が行う学習評価の資料として用いることはできないことに留意する必要があります）。

教員が CAN-DO リストを活用して授業を改善・検証すること、生徒が CAN-DO リストを活用して自律的に学び続けることは、今後、一層重要となるでしょう。

おわりに

国は、「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月）の基本的方向性の1つとして、「未来への飛躍を実現する人材の育成」を挙げており、その中には、グローバル化が進行する社会においては、未来への飛躍を担うための創造性、国境を越えて人々と協働するための英語等の語学力、コミュニケーション能力、異文化に対する理解などを培っていく視点が一層重要になっていると示されています。

このような状況の中、英語の授業では、子どもたちの語学力を育成することはもちろん、英語を用いた実際のコミュニケーションの場面を設定するとともに、子どもたちが思考・判断・表現できるよう、授業のデザインそのものを改善することがとても大切です。「洋書を活用した英語学習の実践研究」では、「1つ1つの英文を読む」ということにとどまらず、「話の流れを考えながら読む」「読んだ感想を友達に伝える」「洋書を通してその国の文化を知る」というように、子どもたちが主体的に考えたり、視野を広げたりすることにも取り組んできました。

「大阪で英語を学んだ子どもたちが、将来、英語を使って活躍する」…そんな子どもたちの未来を思い描き、授業づくりに取り組んでみませんか？